



「子ども理解」と体育実践

西田 佳（東京支部 稲城市立稲城第二小学校）

1 なぜ、「子ども理解」か？

人との関わり方が苦手だと感じつつも教師になった私ですが、案の定、とても苦しい初任1年間を過ごすことになりました。そんな私にとって同志会の教材や指導法は、まさに命綱。授業をおもしろく、魅力的なものにすることで、子どもたちを惹き付け、教師として生きて来ることができました。

そんな中、教員13年目で出会ったのがテルヤくん。言葉に困難を抱え、運動大嫌い。それまで、私が身につけた技が全く使えず、四苦八苦しみます。このことを実践記録に綴り、同じ民間研の教育科学研究会の仲間との学習会で実践報告をすると、テルヤくんについて根掘り葉掘り質問攻めです。言葉に詰まる私。学習会后、「こんなに一人の子どものことを考えたことがなかった…」と漏らすと、「逆に、子どものことしか考えてこなかったよ」と教科研のある仲間に使われます。「子ども理解」を軸にして、授業や学級を成立させている教師たちがいることを知りました。

2 どう「子ども理解」をするか？

「『子ども理解』とは言うけど、子どもを完璧にすべて理解しきることはでき

ない。他人なんだから。でも、理解しようと努め続ける」そう仲間に教わります。

ある子の行動や言葉、瞬時に見せる表情・視線やその変化、休み時間の様子、教科ごとに違う学習の様子、放課後の過ごし方、家族関係や友だち関係、親や他の教師からの言葉…様々な角度からその子を見つめ、その子がどのような過程を経て今ここに存在するのかに思いをはせ、その子をまるごとつかむことを試み、その子が抱える困難、課題、発達欲求とは何かを考えていきます。

ここで大切だと思うのは、その子固有の課題とは何かを問うことです。以前の私であれば、例えば「新自由主義的」と子どもものの見方の困難を記述することがよくありましたが、こうした表現は止めました。新自由主義が駆動する社会に生きる子どもたちにとって、その洗礼を全く受けていない子など恐らくいません。また、「的」というのですから、新自由主義そのものではないわけです。みんながある程度、影響を受けているにもかかわらず、その子だけが、「問題がある」と他者に捉えられがちな行為を繰り返すのはなぜか？その子固有がもっている困難・課題・欲求とは何かを考えなければなりません。これらはその子の行

動原理のようになっている場合が多く、授業のみならず、学校生活、家庭生活、そして社会全体とあらゆる物事が、その子にどう見え、だからそのような行為をするのだと、その子の側から物事を見るよう努力していきます。これらは、新自由主義社会の歪みが、個々人の困難としてどのように現れているかを具体的につかむ試みでもあり、とても困難な現代の学校を生きているからこそ、意味も大きいように思います。

こうした困難さは、子どもたちに素直に話してもらったり、書いてもらったりできれば捉えやすいのですが、しかし、そう簡単なことではありません。小学生はまだ自分のことを客観的に捉えられていませんし、新自由主義の現代において自分の弱みを自らさらけ出すなんてしたくなるはずありません。

そこで講座では、子どもをつかむための試みとして私が取り組んでみた「その子を書いた詩や物語の読み方（フィクションの利用）」「授業中の子どもの言葉の聴き方」などを紹介します。

3 体育の授業と「子ども理解」を結ぶ

体育の授業づくりでも「子ども理解」は重要な意味をもつように感じます。私は実践記録に「子どもが変わった」と表現することがよくあります。しかし、「子ども理解」を深めることで、その変化以前に、そもそもその子には、どのように、学びや運動・スポーツ文化が見えていたのか、「子ども理解」は問うことになります。ですから、子どもの「何が」「どのように」変わったのか、その変容の質

をしっかりと捉えることにつながります。

例えば単元において、初期に問題行動を見せていた子どもが、後半には行動が落ち着いてきたという「変化」を捉えたとします。しかし、この子が他の授業においては、相変わらず問題行動をとっていた場合、その子が抱えている困難・課題・ものの見方が「根本的に変わった」わけではないでしょう。その子の問題行動につながるものの見方は、一方で、その子の人生にとって必要だからこそ身につけてきた見方でもあります。つまり、困難の中で生きてきた中で、「自分を守るための術」として獲得してきた大切なものでもあるのです。だから、これを1つの授業において、簡単に根本的に変化させるなど、そう容易く起きるわけがありません。落ち着きは、むしろ教師がその子の問題行動が起きないような環境設定ができるようになったことによって、引き起こされたのかもしれない。このように「子ども理解」は、子どもの変化の質をすどく問うことになるのです。

講座では、「好きなものごとにはとことんのめり込むが、苦手なもの、嫌いなものとは関係を断ち切る」という術を身につけてきたメイさんと向き合ったラグビーの授業や、そのメイさんの合った教材は何かを考える中で試みたボッチャの実践などを紹介します。

〔参考文献〕

「だって、勝つことが、どうしてそんなにうれしいのかわからないんだもん」『たのしい体育・スポーツ』2019年冬号「ボッチャだけは勝ちたいもん！」学校体育研究同志会編 2019年全国大会提案集